

豊かな言語環境に触れる場の充実をとおして育む
学習意欲・国語力・徳育の育成

確かな学力と自立する力の育成ー確かな学力の育成ー

◆ 所属・提案者（◎代表者）

春日部市立桜川小学校

◎福岡 秀晴・杉本 隆昭・和田 浩・関根 達緒

ねらい

本校児童は、知的好奇心が旺盛で、人懐っこく体を動かすことが大好きである。一方、基礎的・基本的な知識や技能、思考力、人間関係づくりに課題がある。この解決には、豊かな言語環境に触れる場の充実をとおして、児童の学習意欲を向上させ、生きてはたらく国語力（読むこと・書くこと・交流）や豊かな人間関係を育成することが重要である。豊かな言語環境に触れる場を充実させるために、以下のような実践を行った。

実践内容

①児童の長所や頑張りを、同じ班の仲間が言葉で表現する。
○帰りの会で、ある児童（主役児童）の長所や頑張った点を、同じ班の仲間が一人ずつ発表する。最後に教師が、長所をその児童に伝える。
○主役児童は毎日、名前の順で交代する。

②児童の長所や頑張りを、隣席の仲間が文章で表現する。
○学級活動で、児童の長所や頑張りを、隣席児童が文章で表現する。
○書いたものを教師が要約し、学級通信で学級全体や家庭に報告する。

③学校行事の代表に、全児童を輪番制で担当させる。
○学校行事の代表（司会・はじめの言葉・一人読み）に、全児童を担当させることで、自信や活動意欲、プレゼンテーション能力をもたせる。

④6年間を見とおした「音読カード」の工夫とフォーマットの共通化
○音読カードの最後には、その月の出来事などを「五七五」で書けるような欄を設け、本校の特徴的な取組である「五七五」の短作文に、日ごろから取り組めるようにした。
○音読に気を付けるポイントを示し、保護者の協力も得ることで、児童が継続して音読練習に取り組めるようにした。また、6年間を通して使用することを考慮し、フォーマットを学校全体で共通化することで、音読練習をしやすくした。

⑤豊かな表現を学ぶ「今月の詩」の取組
○毎年、学年ごとに見直しを行い、教員の思い、児童の実態に合わせた詩を月ごとに用意し、暗唱練習に取り組んだ。各文を暗記することで、美しい日本語や心地よい言葉のリズム、豊かな表現を自然と学べるように工夫した。

⑥行事ごとに全校で一斉に取り組む「五七五」
○自分の言葉で気持ちを表す練習の一環として、昨年に続き「五七五」に取り組んだ。高学年は、「五七五七七」を作成し、今まで学んできた表現の工夫を積極的に取り入れた。
○全校児童が書きやすいテーマとして、自分たちが活躍した行事を取り上げた。行事は、「全校遠足」、「運動会」、「ドリーム集会」を選んだ。また、人権標語やお世話になった方々へのお礼のメッセージなどにも五七五を取り入れ、書くことに自然と慣れていくようにした。

⑦全学年統一した国語の約束を示す「教室掲示」
○黒板の上に必ず掲示し、授業で積極的に活用した。
○低中高学年と段階を経て、内容のレベルが上がるようにした。
○これは国語の授業だけでなく、全ての時間で行う「約束」とした。

⑧階段の空きスペースなどを利用した「慣用句」の掲示
○登校したとき、移動したときなどちょっとしたときに見えるようにし、言葉に触れられるよう掲示を作成した。



- 制作… 4～8月
- 教室や階段に掲示… 8月～翌年3月
- 国語科の学習をはじめ全教科、道徳、特別活動、学校行事、家庭学習で使用

実践時期・期間

セールスポイント

- 多様な言語環境を子どもたちに触れさせることで、学習意欲の向上につながる。
- 「音読」や「五七五」など、他の教科の学習にも役立つ。



実践の成果や課題

【成果】

- 児童の長所を、同じ班の仲間に発表させることで、児童の自己存在感や共感的な人間関係、望ましい言語環境をつくることができた。
- 児童の長所を児童同士で記述し、教師が学級通信で報告することで、国語力の向上や、家庭や地域の信頼関係構築につながることもできた。
- すべての児童に、学校行事や各教科で活躍の場を与えることで、児童の自己指導能力育成や発表の力の育成に寄与できた。
- 音読カードを全学年統一としたことで、6年間を見とおした指導ができた。
- 慣用句や今月の詩、学習の仕方についての掲示物をとおして語彙力を高め、様々な表現方法を使えるようになった。
- 低学年の五七五の取組では、短い言葉で表現しようと思えることで想像力を広げ、様々な言葉で自分の思いを表現できるようになった。
- 高学年では、五七五から五七五七七にしたことで、表現の工夫を多用することができ、内容に厚みが出た。
- 階段に慣用句を掲示したことで、知らないことわざや四字熟語に触れる機会が増え、作文などに活用する様子が見られた。
- 教室掲示を統一することで、どの学年も国語の学び方や交流の仕方が同じように身に付き、全校統一した指導ができるようになった。

【課題】

- 主役児童の発表は、何回も繰り返したりとマンネリ化してしまうため、発表方法や内容に工夫が必要である。
- 今月の詩や音読は習慣化したがるが、一か月間同じ内容の時もあり、飽きてしまうことがあった。教科書の音読やほかの教材を掲示する等、児童の実態に応じた取組をしてみてもよかった。
- 語彙が少ない児童が多く、五七五のバリエーションが増えないことがあった。表現を工夫した言葉を書き溜めるなど、語彙を増やしていくような工夫が必要であった。
- 階段の慣用句を学期ごとに作り替えたり、俳句や短歌に変更したりするなど、常に児童が言葉に対して興味・関心をもてるようにしていくことが課題である。

- 学校や学年、ブロックなど皆で協力して製作すると教材研究が進む。子どもの活字離れや言語環境の乱れが叫ばれる中、製作をとおして、教師自身がことわざや慣用句の理解を深めることができる。同時に、学校や学年、ブロックの和が深まることも期待できる。
- さまざまな実践が、児童の学習意欲や国語力育成に役立っているが、常に検証し、改善していくことが必要である。

他校で導入するポイント

失敗しないための方策

教科書や学習指導要領、詩や慣用句にまつわる本などから、どんな内容を「今月の詩」や「階段掲示」に盛り込むのかを決めることが重要。あまり製作に時間をかけすぎて、授業研究や実態把握に支障が出ないように配慮することも必要。学年やブロックで、児童の実態に応じて、十分吟味することも重要である。

- 全校俳句・短歌・群読（五七五・物語文・詩集）発表会などを実施して、家庭や地域に公開すれば、学習意欲向上、国語力育成、家庭学習定着につながる。
- 国語の要約や各教科のまとめに、五七五を積極的に取り入れることで、確かな学力の育成につながる。
- 教室掲示を、より見やすく、使いやすいものにする事で、学年ごとに、少しずつ交流の力や発表の力を身に付けさせることができる。
- 慣用句の挿絵やことわざの使用例に、児童の作品や考えを取り入れることで、生きた掲示になる。このことは、児童の自信や学習意欲向上につながる。

こうすればより高い効果が得られる方策など

外部有識者からのコメント

国語という視点で絞ってまとめ、全体で取り組んで効果をあげている点で工夫がなされている。言語活動が全ての教育活動の中核となっていることは十分理解されていることである。この学校の取組は、国語科を中核としながらも、全ての教育活動に発展させていくような可能性を秘めた取組である。豊かな言語環境を育む取組をより発展させる上で、カリキュラム上での整理統合するなどをして体系化した取組にしていくことが求められる。